

連絡ニュース

日本海を去るにあたって

伊 東 祐 方

日本海における20有余年の研究生活を離れることになり感無量というのが実感でございます。

振り返って、20年という実社会での人生の大半を送ったことになる訳ですが、つい昨今のような気がしている一面、日本海の漁業の歩みをみると、戦後のイワシ流し網全盛時代、まき網漁業の勃興、マアジの盛況、沖合マスの開発、つづいて沖合スルメイカの開発と急速な発展、ベニズワイの籠の導入さらには栽培漁業への期待といった激しい変化をたどってきており、時代の変化の激しさを改めてかみしめている次第です。

その歩みの中にあつて、試験研究機関の果たした役割りはきわめて大きいものがあつたと自負してもよいのではないかと思っております。その成果の大半は諸先輩を始めとして現在の研究者が築きあげた試験研究機関の協力体制にあつたといつても過言ではないと思います。水産研究という応用研究では一個人の研究や一研究機関の努力で調査研究がいちじるしく発展するものでもなく、各機関が協力して研究を進めて初めてその実をあげるものだとすることを如実に示しているように思われます。

日本海における国および府県の研究機関の協力関係は他に例をみないほどのものであり、今後さらに緊密の度を加え、真の共同研究体制を作りあげ、日本海の水産振興に成果をあげられるよう期待して止みません。

しかし、従来の調査研究そのものにも多少マンネリ化の傾向にあることも事実ですし、従来の開発・資源の研

究だけでは社会情勢の激しい変化に対応するには問題が残るように思われます。したがつて、今後の日本海の漁業振興の方向性の樹立とあいまつて、研究の方向性を見極めなければならない局面にあるように思います。それだけに、今迄と異なつた体制づくりが必要と同時にその困難性もつきまとうとは思いますが、それら乗り越えてよりすばらしい体制づくりを希望します。

最近、資源の積極的培養といった方向も打ち出されており、現にその一端として日本海の栽培漁業の事前調査あるいは増殖問題などが手がけられ、また体制づくりが考えられている現況にあることは周知のとおりですが、それらの実現には体制や研究者の構成さらには方法論などむずかしい問題が山積しているといつたのが実態と思われまふ。この機にあたり、関連機関において、それらの問題について十分検討を重ね、その方向性を確認した上で、その線にそつた基礎的研究を積みあげていく努力を期待して止まない次第です。

最後に、私ごとながら、種々の調査の中途にして去る事態になり、種々迷惑をおかけしている面があるかと思ひますが、その点お許しを願うとともに、長い間にわたり公私ともにご指導ご支援によつて楽しい思い出深い研究生活を送らせていただいたことに対し、紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

(西海区水産研究所底魚資源部長)

＜お も な 記 事＞

- ◇ 日本海を去るにあたって
- ◇ 日本海におけるベニズワイの分布

- ◇ 昭和46年度日本海北部ブロック水試連絡協議会
- ◇ 人 事 異 動

日本海におけるベニズワイの分布

—45年度のかご網試験操業結果から—

伊藤勝千代

近年、日本海海域の底びき網漁業によるズワイガニ漁獲量の減少とは逆に、かご網漁業によるベニズワイ漁獲量の増加がひときわ注目をひいている。しかし、ベニズワイの漁獲量ののびが示されたのは数年の間でごく最近においてはズワイガニと同様の命運をたどりつつあり、関係者には頭の痛いことであろう。

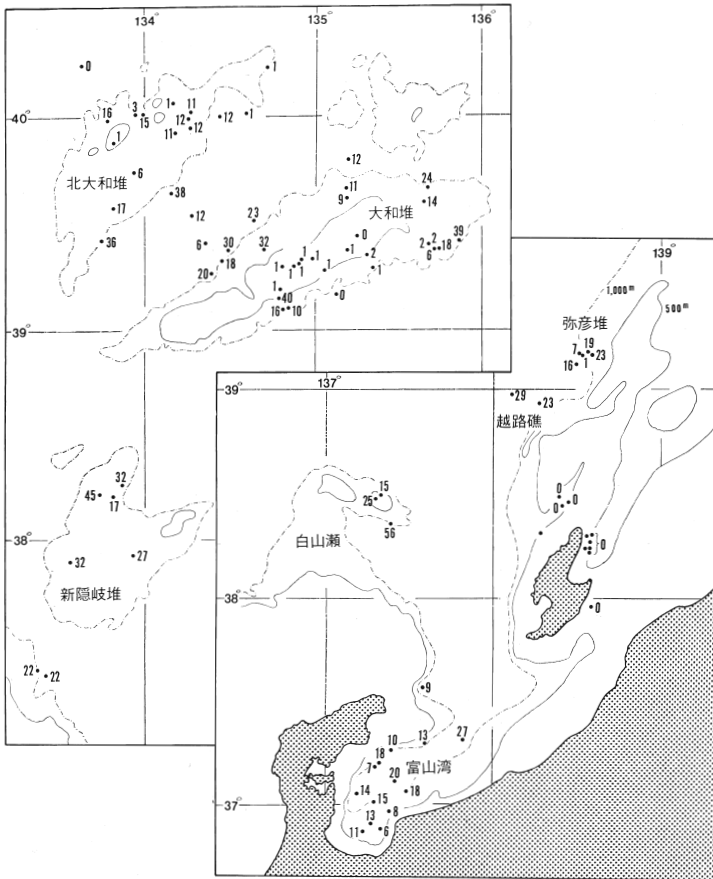
ベニズワイが佐渡や隠岐付近の深海底に生息していることは、文献のうへではかなりふるくから知られて

いたが、その分布範囲はあまり広くなく、ましてやそれを漁業に利用できるとは最近まで考えられていなかった。このことは、深海の開発調査がせいぜい水深500mどまりで、それよりも深海に有用生物が存在するとは予想されていなかった時代の話である。深海の開発試験調査が一段と進んだ現在では、ベニズワイが漁業として利用できるかどうかは別として水平的には日本海の全域から北海道西部海域を経てシベリヤ大陸沿

岸におよび、また、太平洋岸では分布の南限が銚子沖合にまで及んでいることが確認されている。一方、垂直分布をみると深さ約400~2,300mとその巾が大きく、かつ冷水性種という点から考えると本種は日本列島をとりまく深海底にくまなく分布していると思われる。

ところで、このように広範囲の分布をもつベニズワイを漁獲しているのは、日本海および東北の一部府県に限られ、日本海では現在のところ富山、新潟の2県のみである。富山湾からスタートしたこの漁業は、能登外浦沖合、佐渡沖合へと操業区域を拡大し、最近では西は島根県沖合北は山形県沖合へ、一部は大和堆等の沖合堆漁場にまで進出するにいたっている。しかし、このように漁場の拡大がすすむ一方で一部の漁場では早くも漁獲の影響が顕著にあらわれているという事実を見逃すことはできない。したがって、ベニズワイ資源については今後の開発に多大な期待が寄せられているとはいえその進め方にはズワイガニの轍を踏まぬよう慎重な配慮が望まれるわけである。

日水研では、昭和43—45年度の3カ年に行なわれた「日本海に関する総合研究調査」の一環として、新潟・富山・石川の3県水試の協力を得て、これまで未調査のまま残り残されていた日本海沖合の深層海域の調査を実施した。この調査は、はじめて日本海に大型調査船開洋丸を回航したということもあり、その経緯についてはすでに本誌でいろいろな面から紹介されているので、ここでは企画段階の時点で深層生物中最重要種と思われていたベニズワイについて、かご網による試験操業成績をもとにして、おおまかな分布状態のべてみる。



第1図 かご網試験操業結果による1かご当りベニズワイ漁獲尾数分布

第1図は、最終年度の昭和45年度に、越路丸・立山丸・白山丸およびみずほ丸で行なつたかご網漁獲成績から、各点1かご当りのペニズワイ漁獲尾数を算出し分布図をえがいたものである。佐渡両津湾に面する6点(2月)を除き、大部分は7~10月に実施したが、かご網の放置時間等いろいろな問題はあつたが、ここでは1かご当り漁獲尾数が単純に分布密度に比例するものとし海域別に分布状態をみると次のとおりである。

佐渡北部

ここは新潟・富山船のそれぞれ一部が操業しているが、今回の結果によると、分布密度は弥彦堆よりも越路礁の方がやや高いようである。佐渡付近では一般に密度は低く、瓢箪

礁から両津湾北部にいたる海域では水深の浅いということもあつて分布はみられなかつた。

富山湾

分布密度の最高地点は湾口で27尾が示されたが、多くは20尾以下であつた。しかし、この漁場のカニは、他の海域のものと比較してきわめて身入りが悪く、漁場価値はかなり低いと思われる。

白山瀬

富山船が現在もつとも多く利用しているところで、東部のある点では全点最高の56尾が記録された。調査地点が少ないので詳細にはいえないが、情報等から推して漁場価値は比較的高いようである。

北大和堆

この海域は南部の数点を除くと、予期したよりも分布密度は低いと思われる。

大和堆

中央域は浅いということもあつてズワイガニが多く入網した。1,000m線の外縁部では西部付近が平均して密度が高く、また、東部と南部でも比較的密度の高いところがみられた。

新隠岐堆

この海域は5点とも分布密度が比較的高く、大型で身入りのよい点を考慮すると、調査海域中もつとも漁場価値が高いと思われた。さらに、新隠岐堆と隣接する隠岐海嶺の東側海域も、2点の調査結果からみる限りでは、分布密度は比較的高いようにみうけられる。

昭和46年度

日本海北部プロツク水試連絡協議会

山形県水産試験場

昭和46年6月4・5の両日、山形県鶴岡市において北部6県の関係者出席のもと、標記の会議が開催され下記の議事により終始しました。

記

○全体会議

- 1 45年度採択事項の処理経過報告
- 2 全国水試場長会の動静について
 - 1, 2 全国水試場長会報 81, 84参照
- 3 46年度事業計画の概要および機構、予算について
各県水試責任者から説明

○場長分科会

- 1 漁船漁業
 - 1) 漁場の高度利用と開発

- 2) 漁海況予報の推進
 - 3) 漁具漁法の改良
 - 2 増養殖の推進
 - 1) 栽培漁業の技術体系の確立
 - 2) 日本海型養殖技術の確立
 - 3) 漁場改良造成技術の確立
 - 4) 淡水養殖技術の確立
 - 3 流通加工
 - 1) 加工技術の開発
 - 2) 保蔵包装技術の向上
 - 4 漁場環境の保全
 - 1) 漁場環境の基礎調査
 - 2) 漁場水質基準の確立
 - 3) 漁場環境の改善
- 国に対する要望事項

- 1) 水産業改良普及員の所属を試験研究機関に所属させた
- い。

- 2) 大規模魚礁の設置事業の促進をはかる。
- 3) 専門技術員の受験資格として知事推選によるなどの再検討
- 4) 標識放流の効果を増大するための予算措置を講じてもらう。

○漁業分科会

- 1 今後における調査船の運航について
 - 1) 北部日本海一帯における各県共同の底魚資源の再点検、即ち統一された定点調査による資源の再評価
 - 2) 業者船へ直接的な漁業生産面での指導
- 2 漁海況予報事業の迅速化試験

について

1) 過般の漁海況予報事業全国会議の席で日水研提案の沖合スルメイカを対象とした案件は中止となった。しかし北部ブロックはスルメイカのみに限定せずマスも対象とした

従来の漁況海況の速報システムをすすめ、更に海況に重点を絞れば実行化が推進されよう。

3 深海開発 (特にベニズワイ、ズワイガニについて)

1) 日本海の深海域の有有用魚種開発は日本海の場合大陸棚漁場制約から解放されるものの一つである。標記のほかにバイ類、エビ類があげられる中で笹漁業が有効である。問題としてみる場合ベニズワイでは流通の点、生出荷の価格などから加工出荷が当然なされるべきだ。

要望事項 (日水研)

- 1 迅速化試験は北部ブロックとしてマスも含めて頂きたい。
- 2 海洋観測定線は主要魚種 (マス, スルメイカ) を中心に重点的に配分し、各県は縮小して欲しい。
- 3 現行の漁海況週報は廃止し、主要魚種に関する漁況および海況についての速報発行が望ましい。

・増養殖分科会

- 1 本年度の重点事業について
各水試の事業担当者から本年度の計画実施調査に関する段階的なすすめ方について質疑応答する。
- 2 漁場資源生態調査に関する意見交換
産卵親魚分布に係る調査の扱い方や発育段階別分布生態上で問題となる漁具漁法それに必須となる船船にかかわる点等々について意見を交換する。

3 情報交換について若干あつたが要望事項の提案はなされなかつた。

今回の当番県は富山で開催期日、場所は一任のかたちをとる。

標識スルメイカ発見報告についてお願い

日水研調査船“みずほ丸”は日本海沖合域で標識放流を実施しましたので、これらのイカを発見されましたらお知らせ下さるようお願い致します。

標識放流実施概況

- 1 標識票種類・標識記号
アンカー型 (日A)
はさみこみ型 (日B)
- 2 放流年月日
昭和46年6月7~21日
- 3 放流海域
ウツ陵島~南部沿海州~大和堆~佐渡沖を結ぶ海域
- 4 放流数 日A..... 2,903
6,603尾 日B..... 3,000
日A-日B...700

人事異動

6月1日、京都府水産試験場では定期人事異動、また日本海区水産研究所でも次のとおり異動がありましたのでお知らせします。

なお、連絡ニュース No.238号の人事異動記事では編集者の手違いから、石川県水産試験場と同増殖試験場の異動を混同して掲載しましたので、次のとおり訂正させていただきます。紙上を借り深くお詫び申し上げます。

石川県増殖試験場 4月1日付

命 場長 (調査研究科長) 江渡唯信

命 調査研究科長 (技師) 中谷 栄

命 主事 (主事補) 橋本重昭

命 技師

(水産課) 皆川哲夫

命 技師 (技師補) 徳田 進

新規採用 技師補 鶴川幸栄

免 場長兼務 (水産課長) 屋代勝敏

京都府水産試験場 6月1日付

- 1 配置換えにより転出
水産課長補佐兼漁政係長え (場長補佐兼資源課長)
松井瑛實
水産課分室浅海開発係長え (増殖課長) 古旗喜太夫
水産課分室組合指導係長え (加工課長) 太田隼太
農業指導所丹後畜産試験分場え (総務課技師—無線通信—) 中村伊太郎
- 2 配置換えにより転入
命 増殖課長

(水産課分室浅海開発係主事) 松岡祐輔

命 加工課長 (水産課分室庶務係主査) 齋藤泰治

3 水試内において昇格
命 資源課長 (資源課技師) 加藤安雄

退職者 (資源課浅海開発船みさき丸乗組員、技師) 小松兼蔵

日本海区水産研究所

配置換え 6月1日付
西海区水産研究所底魚資源部長 (日水研資源部長) 伊東祐方

命 日本海区水産研究所資源部長 事務取扱い
古川 厚
併任 6月25日付
水産庁調査研究部研究第一課 谷野保夫